

ヒトのことばと鳥の歌

ジュウシマツやカナリアなどのある種^{しゅ とり なわ ば}の鳥は縄張り^{しゅちよう}を主張^{きゆう}したり、求^{あひ}愛^{うた うた}のときに、まるで歌を歌うかのようにさえずる。次から次へと新^{つぎ つぎ あたら}しい「歌」^{うた}を覚えた結果、100以上の「歌」が歌えるまでになる鳥もいる。鳥はヒトとおなじように、音声^{おんせい}という手段^{しゅだん}を使ってコミュニケーションをとっているのだから、では、鳥^{とり}にとっての「歌」^{うた}とヒトにとっての「ことば」^{ちが}に違いがあるのだろうか。

ヒトの「ことば」と鳥の「歌」の習得過程^{とり うた しゅうとく}において、似ている点が三つ挙げられる。1点目は、まねるという経験^{てんめ けいけん とお}を通して「ことば」や「歌」の学^{うた}習^{がくしゅう}をするということである。ヒトの子供は聞こえてくる周^{こども き まわ}りのことばをまねることで「ことば」を習得^{しゅうとく}していく。鳥も同様の過程を経て、「歌」が歌えるようになっていく。つまり、成鳥^{せいちょう}の「歌」^{うた}を一度も聞くことなく育った鳥^{いちど き そだ とり}は歌うことはないのだ。2点目は、人間の子供も幼鳥^{うた てんめ にんげん こども ようちよう く かえ れんしゅう}も繰り返し練習^{うた}することで、「ことば」や「歌」を習得^{しゅうとく}していく。人間の乳児^{にんげん にゅうじ}が、「バブバブ」などの音声^{おんせい}を繰り返すのは幼鳥^{く かえ ようちよう}が最初^{さいしよ}に「歌」^{うた}の一部分を繰り返すのと同じだ。3点目、人間の子供も幼鳥^{てんめ にんげん こども ようちよう あたら}も新^{うた}しい「ことば・歌」^{がくしゅう}をたやすく学^{うた}習^{がくしゅう}できるが、大人や成鳥^{おとな せいちょう}は子供に比べて学^{こども}習^{くら}に時間^{がくしゅう}がかかる。人間の親子^{じかん にんげん おやこ}が同時に外国語^{どうじ}を学^{がいこくご}び始^{まな}めると、子供^{はじ}のほう^{こども}が早^{はや}く上^{じょうたつ}達^しすることはよく知ら

れているが、^{とり}鳥にも^{おな}同じ^いことが言える。

また、^{しゅうとく}習得過程以外にも^に似ている点がある。鳥の「^{てん}歌」に^{とり}ヒトの^{うた}方言^{ほうげん}にあ
たるようなものがあり、^{おな}同じ^{しゅるい}種類の鳥でも、^{とり}生息^{せいそく}している^{ちいき}地域^{うた}によって歌^{うた}
^{かた}方が^{こと}異なる。

しかし、ヒトの「^{とり}ことば」と鳥の「^{うた}歌」とには異なる点もある。鳥の「^{こと}歌」
は^{なわば}縄張りの^{しゅちょう}主^{きゅうあい}張^{うた}や^{たい}求^{たい}愛^{たい}のために^{うた}歌^{うた}われるの^{おと}に^{じゅんぱん}対^{じゅんぱん}し、ヒトの「^{こと}ことば」は
それ以外の^{いがい}さまざまな^{もくてき}目的^{つか}にも^{とり}使^{うた}われる。また、鳥の「^{おと}歌」では^{じゅんぱん}音^{じゅんぱん}の^{たんご}順^{たんご}番^{たんご}
を変えても「^{うた}歌」の意味が^い変^みわる^かことはないが、ヒトの「^{たんご}ことば」では、^{たんご}単^{たんご}語^{たんご}
の^{じゅんぱん}順^{じゅんぱん}番^{じゅんぱん}を^か変^{ぶんしょう}える^いことで^み文^か章^かの意味が^{ぶんしょう}変^いわる。

なぜ、異なる種であるヒトと鳥が^{こと}音^{しゅ}声^{しゅ}という^{とり}手^{おんせい}段^{しゅだん}を使^{つか}って^{しゅだん}コ^{つか}ミュ^{つか}ニケー
ションをとるようになったのだろうか。鳥は^{とり}木^きの上^{うえ}では^は葉^{えだ}や^{しかい}枝^{さえぎ}に^{さえぎ}視^{しかい}界^{さえぎ}を^{さえぎ}遮^{さえぎ}
られ、^{あいて}コ^みミュ^みニケー^みションの^{あいて}相^み手^みが^{あいて}見^みえ^みな^みく^みな^みって^みし^みま^みう^みので、^{おんせい}音^{しん}声^かを^{おんせい}進^{しん}化^か
させ^{かんが}コ^{かんが}ミュ^{かんが}ニケー^{かんが}ションをとるようになったと^{かんが}考^{かんが}え^{かんが}ら^{かんが}れている。ヒトにも
^{どうよう}同^{てん}様^{てん}な^{てん}点^{てん}がある^{てん}のではない^{てん}か^{てん}という^{てん}説^{せつ}もある。